

一刻も心の安静を得ることが出来ないのである。

自分は自分に殺意なく、又自ら手を下したものでないにもせよ、花枝の愛を得んたがために、彼に脅迫されて、戀に目盲ひた爲め、前後の思慮もなく、此大罪惡に加擔して、その結果は今かうした不安の地に立つたのである、花枝はア、いつたけれども、果してその約束を實行するであらうか、例へ實行するとしても、二人が別々に首尾よく佛蘭西に上陸することが出来やうか、若しそれが出来なければかりか、汽船に乗り移らない前に、若し悪事が曝露してその筋の手に捕はれるとしたら、自分の身は仕うなるか、たとへ本犯でなく死刑は免るゝとしても、無期懲役は當然であるア、之れほどの苦心をして贏ち得るものが、重いく刑罰であるのだ、自分は實に申譯のないをした大變な魔道に踏み入つた、仕うしたら可からうか、と貫一は這んな冥想を懐いて、我が家に歸つて來たのであつた、彼は今悔悟の門に一步を投じたのである。

悄悄として、二階座敷の己が居間に這入らうとすると、其處に一個の人影があつ

た、時も時、折も折、彼はハツと戦慄へて後退りした。

其物音に人影は此方を振向いた、それは思ひも依らぬ收二であつたのだ。

「呀ッ、收さんか……」と、彼は颯と顔の色を變へた、疑心既に暗鬼を生じて、深く我が身を詰めるのである、收二は故らに沈着いて見せた。

「オウ貫一君か、久しく逢はない、親族會議以來だからね、一昨日も昨日も訪ねたが、不在だつたので、今日は是非逢はなければならぬので、先刻からお邪魔してゐたのだ。」と、彼は一切の腹を包んで何氣なくいふ。

貫一はホツと胸を撫で下したが、それでも尙收二が何かを嗅ぎ附けて來たのではあるまいかと思ふと、身慄ひを止めることが出来なかつた。

「少し銀行の用事で、旅行してゐたものだから……何か急用が出来たかね。」と、勉めて平然と云つたが、その詞の調子は亂れて、何となくそはしく聞けた。

「少し相談したいとがあつてね、下宿では人に聞かれる虞があるんだッ、一寸その邊まで飯でも食ひに行かうぢやアないか。」と、收二は何氣なく誘ひをかけた。

貫一は愈胸安からぬ心地であつたが、今それを拒めば却て怪しまれる基であるど、咄嗟に思案して快く之に應じた。

貫一は疲れ切つた身を起して收二の後に従ひ、己が下宿を出た、收二は貫一に向つて。

「少し遠方だけれど、大森まで来てくれ給へ、八景樓へ行くつもりだツ。」と突如に斯う云つて、貫一の態度に注意した。

「ナニ、八景樓？……。」と、貫一は道に身慄ひを禁ずることが出来なかつた。

「遠方で氣の毒だけれど、鑑定して貰ひたいものがあるんだよ。」と、彼は巧に貫一を欺いて、強て八景樓へ連れ出した、其處には鶴次と寅吉が待つてゐるのであつた。

(五十二) 悔悟 (5)

八景樓と聞いて貫一は針の筵に、我から座する心地がした、八景樓は彼に取つて最も恐るべき所である、何んとか辭を構へて、場所を變へさせやうとするが、收二は初めより企めるとのあればこそ、何んで八景樓を拒むのかと詰問的にせり詰められるので、貫一は自分の弱味のために、心ならずもその後に従つて行つたのである。

貫一の知らない女中が、記憶のない四疊半の小座敷に通してくれたので、それも彼はその恐るべき追懐のない座敷を選んだのに、ホツと息を吐いた。

一通り酒肴が運ばれると、收二は女中を遠けた。

「貫一君！外でもない、花枝が蜘蛛の目を使嚇して、父を電殺し、遺産を横領した顛末を、包まず僕の前で、白自してくれ玉へ、而して君は君の罪を懺悔して、天と

人との憐れみを求め玉へ。」

收二は居住を正し、両手を突いて、儼かに斯う云つた、威容凛として、許すまじき劍幕が眉宇の間に現れてゐた。

「エ、エーッ、花枝さんが、オ、叔父さんを……。」と、云つた切り、貫一は死人の如く蒼ざめた顔色をして、ブル／＼と身を慄はした。

「貫一君！包み隠してももう駄目だッ、此八景樓は君の罪惡の記念だぞ、新橋の俠妓鶴次も、秘密の怪屋川口屋を逃走した車夫の寅吉も、既に當家の別室に控へてゐる、僕の命令一下、何時でも是處へ出て来て、君の面皮を引き剥いで見せる、多くいふを要しない、一切の事實を、さア是處で男らしく自白してくれ玉へ、僕は君が花枝の傀儡であることを知つてゐる、憐れむべき戀の奴隷となつて、天人共に容さるる叔父殺に加擔した君を、憎むといふよりは、寧ろ憐れむのだッ、潔く事實を自白して、少しでもその罪の軽くなることを求め玉へ、一切の準備は整つてゐるのだッ、如何君が此の場において知らぬ存せぬと云つても、僕の方には生きた證據が二人も

ある、直ちに電話を大森署にかけて、君を捕縛して貰ふとは、易々たる業だッ、君は是處で警官に逮捕されて出て行きたいか、それとも一切を僕の前で告白して、花枝の所在を告げて、自ら僕に付き添つて貰つて自首して出で、少しでも我々に利益ある供述をして貰はうとは思はぬか、而してかくなつた上、少しでも世間を無用に騒がすことを止めて、田邊の家の名譽を、成るべくだけ汚さないやうに勉める氣はなにか、男らしく悔悟してくれ玉へ、僕が故らに君を是處に引き出して、斯ういふことをいふのは、君の自發的懺悔を求めためだ、多少の同情なくして此行爲は出来な

い、貫一君！懺悔してくれ玉へ、そして深く男らしく自白してくれ玉へ。」

收二は聲涙共に下る熱烈な眞率の態度で斯う云つた。

貫一は、啞の如く沈黙して両手でその頭を押へ、煩悶懊惱の苦痛を忍ぶものゝ如く、身を慄はして座にも堪へぬ風情であつた、一たび悔悟の門に一步を入れた彼は今の收二の熱烈な言動に、その良心を極度に刺戟され、夢現の如く悶へ悶へるのであつた。

「シ、シユ、收二君！ユ、許してくれ玉へ……。」と、終に堪りかねてカッパと其處に身を伏した。

「オウ、ソ、それでは悔悟してくれるか、而して一切の事實を隠さず僕に話してくれるといふか、ウム、悪に強いは善にも強い、さア、如何にして、花枝は父を殺したか、如何にしてアノ遺言状を得たか、ソ、それを、コ、是處で、包ます僕に話してくれ玉へ。」と、收二は焦り立つのであつた。

「收二君！ミ、水！ソ、その水を一杯くれ玉へ、ハ、杯洗の水で宜い、ノ、飲ましてくれ玉へ。」

「オウ水か、待て〜。」と、收二は杯洗を取つて貫一に與へた。

(五十三) 悔 悟 (6)

グツと杯洗の水を一息に飲み干した貫一は、漸く少し心も落ち着いたらしくホツ

と息して、膝を立て直した。

「收二君！許してくれ玉へ、僕は、僕は、今自分の犯した罪の爲めに、悶へ悶へて少しも心が安まらないのだ、這んな苦痛を懐いて、一日一時の安を偷まうより、一切を自白し、懺悔して、少しも早く安心立命の地に立ちたい、もう鶴次と寅吉とが君に會見した以上は、包まうとしても包むとは出来ない、序に鶴次と寅吉とやらを是處に呼んでくれ玉へ。」と、彼は收二に要求するのであつた。

「オウ、然うか、君が自發的に、一同の面前で自白しやうとする心は偽らざる悔悟の表象だツ、僕は満足に思ふ、では二人を呼ぶから……。」

收二は斯う云つて手を叩いて女中を呼び、二言三言囁いた。

すると間もなく鶴次と寅吉とは、其處に現れた、鶴次は貫一を見て、軽く目禮したばかりである。

「オウ、鶴次！メ、面目ない、汝の聞く前で一切を懺悔する、寅吉とかいふ君も、聞いてくれ玉へ。」と、貫一は大息を吐いた。

「鶴次さん！寅吉君！お聞の通りです、貫一君はその罪を悔悟して、潔く我々の面前で一切を懺悔するといふのです、さアモット此方へ寄つて聞いて下さい。」と、收二は二人に席を與へた。

貫一はやをらその口を開いて、一切の顛末を潔く自白するのであつた、花枝に戀慕して、彼を奥庭に脅迫したことから、王子の扇屋の會見に、初めて惣兵衛殺害の秘計を聞き、今更引くに引かれぬ破目となつて、心ならずも之に同意し、蜘蛛の目を加擔人と頼んで、彼に殺害せしめたときまで落もなく物語つた。

始終を聞き終つた收二は、今更の如く花枝の心の恐ろしさに戰慄して鶴次と面を見合し、暫時は詞も出でなかつたのである。

「ウム、それで一切の顛末は判つた、然し蜘蛛の目といふ奴が、仕ういふ手段で仕うして父を殺したかい、まだ判らない、それを詳しく説明してくれ玉へ。」

「それは斯うです、アノ夜叔父さんの寢室に沿つた廊下の雨戸は締りをせずに、鍵が外してあつたのです、蜘蛛の目は其處から忍び入りました、そして天井の電氣を

捻つて、その玉を外し、電流を直に肉體に加へたのださうです、然し燈火の電氣で果して致死するや否やは不明で、効果が疑はしいため、電流を通ずると共に、叔父さんの口を壓迫して窒息させたといふとです。」と、かう云つた貫一は、その當時を回想して、恐ろしさに堪へぬ如く身を慄はした。

「そして初めから罪は久子さんになすり附けるつもりであつたのです、花枝さんは何れ警察に召喚されて家庭の内情を調べられるに違ひないと思つてゐたので、然うなつたら、お久の一件を忌憚なく曝露して、その筋の注意を久子さんの一身に集めるつもりでゐたのです、然るに然ういふ仲へ久子さんが、偶然飛び込んで、蜘蛛の目の逃走する所に摺れ違ひ、御丁寧に證據の櫛まで落していつたものですから、花枝さんに取つては實に此上もない好餌を與へて了つたのです、然し人盛んなれば天に勝ち天定まつて人に勝つとはよくいひました、花枝さんは今日にも逃走する處があります、早くその筋の手を廻して貰はないと、肝腎の處で流星光底長蛇を逸する不覺を招くかも知れませんが、さア收二君！僕を大森署へ連れて行つて下さい、一切

を警官の前で残る處なく、自白します。」と、貫一は、肩の重荷を下して、樂々したやうに、悪びれた態もなく、收二を促すのであつた。

「イヤ貫一君！モウ少し待つてくれ玉へ、まだ一つ聞いて置かなければならぬとあがる。」と、收二は焦つ貫一を引き止めた。

(五十四) 悔 悟 (7)

焦つ貫一を引き止めた收二は、更に詞を改めて、一層嚴肅な態度になつたのである。

「之は一層重大な問題だッ、場合に依ては君が生きた證據になつて貰はねばならぬ、といふのは外でもない、かの父が残した遺言狀である、彼れは仕うして、花枝が父に書かせたのだッ、僕は財産が欲しいのではないが、先祖が靴々辛苦して子孫の爲めに残された努力の結晶をムザ／＼花枝に奪はれたのであるから、僕は祖先に

對して之を取返し、そして再び田邊家の資産として嚴重に保護する義務があることを自覺したから、君に聞くのである、彼れは仕ういふ譯だ。」と收二は膝を押し進めて聞く。

「それは私も能く知らないのですが、仄に聞く處に依ると、貴下が父の意に従はず久子さんを妻にした場合此財産を久子に自由にされるのが残念であるから、貴下はその意を翻すまでの間、花枝さんの手において保管するといふ意味の許に作製されたといふことです。」

「ウム、然うか、よし、それだけ聞いて置けば、充分だッ、まづ遺産も散逸せず回復される。」と、斯う云つて、晴々しい面になつた收二は、憐れむ如に貫一を見

「僕は君の罪を憎むが、君の恐な淺慕な意志なくして犯した罪惡のその原因を憐れまざるを得ない、僕個人としては君が懺悔した以上、全く社會から隠遁するのを條件として、その罪を許して上げたいが、法は天下の公器である、漫りに私することは

出来ないのである、唯我々關係者の口述如何に依つて、君の罪を軽くすることは出来やうと思ふ、それに罪を悔いて、發覺せざる以前に自首して出たとすると、司法官憲の同情も得られるし、君の供述が利益に解釋されることになるのだ、だから我々は勉めて君の利益になるやう申立をしやう、さらば深く覺悟をして、警察や裁判所へ出ても悪化せず、證據の少い本件のため、生きた證據になつて、花枝が詭辯を弄して脱れやうとした場合、之を牽制する方法を取つてくれ玉へ、之が僕の最後の頼みだツ」と、收二は肺腑を絞るやうな聲でいつた。

貫一はたゞ黙つて頷いた、而して俄に氣が附いたやうに。

「然うだ、まだいふて置くのを忘れてゐた、お氣の毒な久子さんは、寅吉君が逃げた、め、川口屋に監禁して置くのが危険となつて今夜他に移す筈である。」と、かの蜘蛛町の魔窟を指摘し、その間取々々の模様さへ、詳細に説明するのであつた。

「旦那！から聞いちやア、もう沈乎としてゐられませんよ、少しも早く警察へ行つて、花枝の畜生と、蜘蛛の目の手當をして頂いて、久子さんを取り返さなくツちや

ア大變でさア。」と寅吉は猛り立つ、鶴次はかうなつて見ると貫一が如何にも氣の毒なやうな氣がしてならなかつた。

「太田さん！濟みませんでしたね、萬望勘忍して下さいよ、その代り罪滅しに貴下のお爲になる如な申立を屹度致しますから……。」と、道に優しい女心の本質を現して、貫一を慰め、且つ謝するのであつた。

「イヤそれでは却て恐縮です、苟且にも叔父殺しの大罪に加擔した僕ですから、悔悟した今事實を枉げてまで卑怯に罪を軽くして貰はうとは思ひません、それでは皆さん、萬望僕を連れて行つて下さい。」と、貫一は深く立ち上つた。

收二も鶴次も寅吉も、道に一種悲痛の感に打たれて眼を落した、然しかくであるべきにあらねば、寅吉を先に立て、貫一をその間に挟んで、四人は八景樓を出で、遠くもあらぬ大森署へと急いだのであつた。

(五十五) 最後 (1)

收二を初め三人が、太田貫一を召連れて大森電殺事件の犯人を訴へ出でたので、大森署は俄に上を下への大混雑を極め、警視廳に應援を求め、刑事巡査の總召集をなすやら、全署引ッ繰返る如な騒ぎであつた。

何しろ犯人をお久と断定し、且之を死んだものとして、一旦葬り去つた事件が、全然意外の方面から犯人を出したので、大森署の狼狽は言語に絶した。證據の蒐集といふとより、まづ花枝と蜘蛛の目を逮捕することが急務である。

警視廳と大森署の間に、咄嗟の打合が出来て、蜘蛛の目の蜘蛛町へは警視廳から逮捕に向ふこととなり、花枝は女のと故、取り逃がさぬやうに巧に誘き出せば可い。之は大森署の刑事三人車夫や商人に變装し、何やら貫一に手紙を書かせ、それを携へて急遽大久保に向つた。

目指す百人町の花枝の住宅は、もう十時に垂んとしてゐるので、門が閉ぢてあつた、一人の刑事はかなめ垣の間から身を潜めて邸内に入つた、他の一人は塀を乗り越えてヒラリと彼方に飛んで下り、何處かへ身を潜めたらしい。

残る車夫體の一人が、門を叩いた、七八遍烈しく叩くと、女中が庭下駄を引き摺つて出て来たが門を明ける氣色はなく、中から何誰ですと誰何した。

「ヘイ、乃公は太田さんから大急ぎの御手紙を依託つて参りましたんで……。」とかの刑事は作り聲して答へた。すると女中は一旦奥に引ッ返してまた出て来た、門の開閉を花枝に相談に行つたらしい。

やがて左手の潜り戸が、ギイと開いた、かの車夫體の刑事は素早く門内に這入つて、かの貫一に書かした手紙を女中に渡し、ツカ／＼とその後を跟いて玄關に行つた。

花枝は奥で有價證券やその他の財産目録を整理し、所謂自由行動を取る準備をするらしかつた。

女中が差出す手紙を、花枝が手に取つて讀むと、正しく貫一の筆跡である、書面には一大事件でも記してあるらしく、花枝は顔色を代へて。

「その車屋さんを此方へ通しておくれ、直接に聞かなければ判らないのだから。」と女中に命じた。

女中は承つてかの刑事を奥座敷の廻り縁まで案内して来た、刑事は縁側に兩膝を突いて、丁寧に會釋すると共に油断なく四邊を見廻した。

花枝は書類整理の手を止めて、ジロリと此方を打ち見やり。

「庄吉さんといふのは、汝かい、太田さんの手紙には何か汝が聞いてゐるといふことだが、汝は蜘蛛の目の方から来たんだね。」

神ならぬ身の、その最期の運命を支配すべき、刑事とも知らず、花枝はかう云つて聞くのであつた。

「へい、俺が庄吉なんで……。」と云つた、かの刑事は此時、油断を見済してツと飛鳥の如く身を飛して花枝の前に駈け寄り。

「濱名花枝さん、私は大森署の刑事巡査で横尾庄吉といふものです、少し訊問したいことがありますから、同行を求めます。」と、今までは打つて變つた凛たる態度、ツと腹掛のドンブリから一枚の名刺を取り出し、それを花枝の前に突き附けた。

大森署の刑事と聞いた花枝の驚きは譬ふる物もなかつた、然し彼も大膽不敵の女である、咄嗟に身構へを直して。

「今時分に何んの御用ですか、而して同行をお求めなさるのですか、但は拘引しうと仰有るのですか。」と、故に落着き拂つた態を見せて、高飛車に極め附けた。

(五十六) 最 後 (2)

此奴兎ても一筋縄では難かしく見て取つた横尾刑事は、詞を荒らげて。

「夫だから體裁を思つて、同行するといつたのぢや、同行も拘引もない、行政上の處分に依つて、大森署に引致するんだツ、立て！」と、手強しく叱り附けた。

然し花枝は平然としてゐる、相變らず書類整理の手を止めないで、彼方の手箱の此方の引出を手許に引き寄せて何か探しながら。

「引致なさるのなら、拘引状をお見せ下さい、現行犯でもないのに、漫りに連行される譯はありません。」と面憎く空嘯いたが、然もその顔には雷ならぬ決心の色が現れてゐた、横尾刑事はそれとも氣附す。

「ナニ、小癪なとをいふな、勇殺しの覺があらう、素直に立たず、彼はいふなら、繩打つて引ッ立てるぞ。」と、斯う云つて、グイと右手を伸ばして、花枝の織手を引ッ掴まうとした刹那、花枝は早くもその手を引いて蠶乎と立ち上ると共に、何時の間にも何處から引き出したのか、女持の光弾拳銃をグイと横尾の前に突き附けるが早いか、エイと火蓋を切つた。

光弾は彗星の如き尾を曳いて、ハッ光を放つと共に、横尾は不意を打たれて、身を交す暇もなう、左の二の腕を傷つけられ、思はずよろ／＼と跟めいて倒れかゝつた。

此際を見た花枝はかの拳銃を取り直すと共に、我ど我が手に咽喉に當てゝ續けさるまに二發の引金を引いた、淡い煙と火光とが立ち昇つたと共に、颯と迸る血潮の中に彼はハタリと倒れて蟲の息を吐いてゐる。

室内に續いて聞こゆる一發、又二發の銃聲、然も消魂しき人の倒れる物音這は容易ならずと、奥座敷の外に張り込んでゐたかの二人の刑事は、宙を飛んで玄關から室内に躍り入つた。

飯焚婆も女中も腰を抜かしてガタ／＼慄へてゐた。

二人の刑事が身を伏して室内に躍り入つた時は、花枝はもう殆ど絶息してゐたのであつた。

「横尾什うしたッ。」と、異口同音に叫んで、花枝の死骸の傍に駆け寄つた。

「油断だッ、と思つて油断したのが不覺だッ、左の腕に弾丸が掠つた、その際に投じて了つた、残念だッ。」と横尾は齒齧をする。

電話は一刑事の口から直に大森署に通じられた、同時に同附近の警察にも通報さ

れた。

新宿署から検視の警官が来る警視廳、大森署からも、それ／＼掛の警部が宙を飛んで駆け附けた。一通りならぬ騒ぎである。

然し彈丸は二發とも美事に氣管を貫通してゐる、醫師の手當も施すべき術はなかつた、かくして元兇たる稀代の妖婦演名花枝は、縲紲の辱から脱れて、咄嗟の間にその運命を決したのであつた。

然し彼が死んでもそのまゝ、事件を葬ることは出来ない、大森署の警官は彼の家宅を搜索して、幾多の證據を押收すると同時に、參考として今花枝が座敷一杯に取り亂した書類を一つに纏めて、それをも假りに押收し一まづ本署に引き揚げたのであつた。

かくて残るは蜘蛛の目の逮捕とお久の身の安危である。

(五十七) 最 後 (3)

蜘蛛の目なる蜘蛛の目の隠れ家へは、警視廳の刑事が殆んど總出で逮捕に向つた。何しろ東京目抜の盛り場とて、餘り宵の間に包圍するとは却て彼を取り逃す虞がある。あると見たので、態と時を圖つて十二時頃に現場に向つたのである。

此方は花枝と違つて犖犖な多くの乾兒を蓄へてゐる、人を人とも思はぬ惡漢である、如何なる抵抗を受けることも圖り知らぬので、各刑事は充分に用心を加へて、出口々々を固めつゝ機を見て一齊に、室内に躍り込んだ。

ソレ檢舉だ、と、蜘蛛の目は、例の秘密室で、その愛妾を相手にウキスキーを啣りつゝ、貫一から五萬圓の正金を捲き上げた自慢話などしてゐる所であつたので、ツと身を起して四邊に目を配つた。

すると、各刑事とも、貫一の自白に依つて、此秘密室の所在を知れるものから我

れ先に蜘蛛の目を引ッ捕へやうと、斯せずして此狭い一室に簇り來るのであつた。道の蜘蛛の目も、此狭い天地では如何ともする事が出来なかつた、皿や鉢や徳利などを手當り放題、早速の目噴しにして亂投したけれど、何しろ室は一方口とて、逃るべき道なく、自ら張つた袋の中に追ひ詰められた形で、忽ち數人の刑事が折重つてその場に捻ぢ伏せ、苦もなく逮捕したのであつた。

丑松やその他の乾兒は宵に妙孝のお久を箱詰にして、是處へ運び込むと共に、すぐ川口に歸つたので、是處にはあなかつた。

刑事の他の一隊は妙孝のお久を物色した、室内を隈なく探したけれど、什うしても所在が判らない。

一刑事が不圖、再びかの秘密室に這入つて、注意深い眼で、その邊りを見廻すと什うやら、隅の方の疊の踏み心地が柔かで、頗る怪しむべき節があるので、試みにそれを上げて見ると、驚くべし、其處には半疊ほどの間に板を渡して空隙を作り、その下に楷子段が架けてある。

かの刑事はめめたと叫んで、其處を下りて行くと、其處は階下になつて立派な一つの部屋がある、果して妙孝は其處に、兩手を後手に縛られて放出されてゐたのであつた、それは番人がないため、自殺を恐れて、縛つて置いたものらしかつた。

刑事はその繩を解いて、妙孝を劬つた、此數日の監禁に、罪なくして受くる無情の責苦に心神共に疲れ果て、殆ど生きたる人の心地もなく、茫然としてゐた妙孝は刑事が繩を解いても、一向に喜ぶ色もなくたゞさめ／＼と泣くばかりであつた。

「刑事だッ、安心しなさい、悪徒ではない、助けに來たのだ、さア手を引くから、此楷子を上るんだッ。」と妙孝の手を取つて、引き上げるやうに、連れ出して來たのである。

かくして、一同は警視廳に引き上げた、疑問は茲に一切を氷解し終つた、妙孝は一應取調の上、田邊收二を呼び出して引渡すこととなつたが、收二は彼の感情を急激に衝動して、間違があつてはならぬと、鶴次に頼んで引取つて貰ふことにし、自分は白金の寓居に母のお秋と、愛子宗一とを並べて鶴次が彼を連れて戻るのを待つて

わた
鶴次は快く之を引受け、寅吉と共に警視廳に出頭して、變り果てたお久を受取り
門前から車を白金三光町へと急がしたのである。

(五十八) 再 會 (1)

妙孝のお久は、俠妓鶴次に連れられて、絶えて久しき、而して懐しい我家へ、何
んの恐怖もなく、初めて晴々しう戻つたのである。

變り果てたるその姿、緑の黒髪は可惜無慘に剃り削たれ、ありし花の顔は、幾層
の精神の惱みに憔悴果てしその上に、此數日の牢獄にもまして、酷たらしき場所
に監禁されて、肉體の苦しみを責め刻まれ、見るも痛々しきばかりに瘦衰へ、頰骨の
み高く見えて、その儼を知る由もなかつた。

身に着けし法衣は、何んな罪障でかくせねばならぬのかを想はしむるに共に、所

所破れたる無残の體は川口屋の虐待の態も偲ばれて、かくても尙生命の全かりしを
奇蹟としなければならぬほどの痛ましきである。

收二は一目見るなり、その變り果てた姿に、先づ胸潰れて。

「オウ、久さん……。」と、云つたぎり、續く詞もなく、涙は雨と注いだ。

母のお秋は、女心の一入氣も弱くして、其處に倒れ伏しつゝ、聲を擧げて泣くので
あつた、たゞ宗一人、見違へるばかりの母の姿を、母とも知らず、怪訝顔に物恐
ちして父の背後に隠るゝいぢらしさ、收二は一入胸を掻き撈らるゝやうで、ゐても
立つても堪らなかつた。

鶴次も寅吉も、此の凄慘な光景を見るに堪へずして貫ひ泣きをするのであつた。

「貴下！……。」と法衣の袖を顔に押し當てゝ收二の膝に縋り依つた妙孝のお久は
感極まつて、續く詞もなく、ヨヨと泣いた。

鶴次はヤツと氣が附いた如に、此場の光景を引き立てやうと二人の前に摺寄つて
口を開いた。

「さア最う、ド、何誰も泣くとはありません、死んだと思つた人が、生きて返つたのでは無いませんか、こんな目出たいことはありません、悪人滅び、善人榮る首途です、さア〜笑つて祝酒でも汲みませうよ。」と、道に商賣柄とて、沈み切つた此場の光景を引き立てて、人々に力を添へた。

此一語に收二も漸くそれと心附き、僅に滴る涙を拂つて。

「イヤお恥しうございました、如何にも然うです、死んだものが生きて返つた目出たい日だッ、お母さん、酒の仕度がしてあるのでせう、さア何は無くとも、恩人の鶴次さんや、寅吉君に一献差上げて、ゆる〜長い物語を久にも聞かしてやりませうよ。」と、いふ詞にお秋も涙を拭つて、いそ〜と勝手に立つた、收二も自らそれに手傳ひをして、調へられてあつた酒肴を、廣くもあらの座敷に運んだ。

一巡杯が終ると、收二は改めて鶴次と寅吉に向つて、心から感謝の意を表し、お久にも二人が仁侠の行爲を落もなく物語るのであつた。

鶴次は氣を利かして、寅吉を促し改めて祝ひに来る旨を告げて、トツカワと白金の

家を辭した、二人の胸に思ひ餘る情の緒を、心行くまで語らせやうとする、粹に捌けた思ひやりからであつた。

それと知つたお秋も、自分はまた後からゆる〜話も出来ることと、宗一を連れて、鶴次を其處まで送つて來るとて、續いて家を出た。

後には收二とお久とたゞ二人、互に感慨胸に迫つて、一語も出だす事が出来ないで、相見ても頭を愧された。

漸くにして收二は、沈痛な聲を絞つて情に堪へぬものゝ如く。

「久さん！濟まなかつた、許してくれ。」と、一語腸を斷つ如くである。

「アレ、何んで貴下が……。」と、云つたお久は、俄に自分の姿に心ついて、ハツと調子を代へ、切ない胸を押へた。

「父を殺したものは憎い〜花枝です、然しその花枝は死んで了ひました、父も泉下にあつて、定めしその鑑識の違つたのを惜んで居られるでせう、久さんは事實において僕の表でした、今後は名實共に僕の妻です、今までの艱難辛苦に酬ゆべく、

僕は久さんを必ず安樂の地に置きます、何事も長い悪夢と鐘めて下さい。」と、收二はその手を伸べて、彼の手を強く握つた、ハツと出したお久は慌てゝその手を引いた、宛然物に襲はれたごと………。

(五十九) 再 會 (2)

慌てゝ收二の手を拂つたお久は、切ない愛情を、強て喰ひしぱりつゝ、涙の顔を擧げて屹となつた。

「オ、お詞は嬉しうムいます、けれど妾はお舅様のお憎し味を受けた女でムいます。妾故にお舅様は御無念の御最期をお遂げ遊ばしたのでムいます。況して一旦死んだ積りで、縦へ方便とは云へ、佛戒を受けて此世を捨てた今は俗界を離れた尼の妙子でムいます、所詮罪の深い體でムいますから、もうもう決して、浮世に執着は残しません、萬望妾はあれ限り死んだものと思召して………之から光照寺に歸つて、又

元の托鉢の世を送りますたゞ宗一だけは、貴下の子でムいます、彼れを日蔭者にしたくないばかりに、這んな罪を作つたのでムいますから、萬望宗一を妾と思召して………。」

お久は胸塞がり、詞詰つてヨ、とばかりに又泣き伏した。

收二は情に燃ゆる眼を擧げて、緊張した聲音に一入力を籠め。

「久さん！久さん！ッ、それは間違つてゐる、君が父の誤解を受けたのは、花枝といふ悪魔か田邊家の資産を奪はんがために、愛なくして僕を擒にしやうとした爲め故に呪つた仕業ではありませんか、お父様は實に不幸な方です、父の冥福を祈るのには僕とても異議はありません、然し一時の方便で尼となつたのを、最後まで押し通さうとするとは恐らく、お父様の志ではありません、假りにお父様が御在世遊ばすとして、此の顛末を御覽になれば、必ず花枝を誤信したと後悔して、久さんが僕の妻となるをお許しなさるに違ひないです、正しきものは必らず蘇生へらねばなりません、一度は不義の爲めに壓せられて死んだとしても必ず蘇生すべき

時期があるのです、その時機が今来たのではありませんか、貴下の體は貴女一人の體ではない、老先の短いお母様がある、前途洋々たる宗一があるではありませんかその人人に、貴女は此上まだ嘆きと失望とを興へる心算ですか、久さん！蘇生るべき時機が来たのです、貴女の身に纏つたその法衣は、理由なき迫害を防衛すの爲めの道具ではなかつたのですか、防衛する必要の去つた今日、もう用はないのです、速かにそれを脱いで下さいッ」と、收二は一言一句、心を籠めて、お久を脱くのであつた。

「ハ、ハイ……。」と、云つたお久は再び自分の説を固執して争ふほど、重大な理由を有たなかつた、又それほど悟るべき機会に逢着してはゐなかつたのである。

お久は一旦光照寺に返つて、師の坊に長々の恩を謝した、事情は初めより師の知る所である、彼も亦切に還俗を勧めた。

お久の法衣はかくして再び光照寺に納められた、數月にして彼は再び美しき、そして淑雅な女となつた。

二人の間を親切に斡旋したものは鶴次である、鶴次はその胸に癒やすべからざる情の傷手を負ふてゐるのであるけれども、それは終に彼の永久の秘密として彼自身の胸に秘め了つた、而して二人の爲に媒酌の勞を取つた。

亡父の遺産は訴訟に依つて事なく收二の手に歸つた、彼は當初よりの志に背かず、その遺産は嚴重に保管して決して彼自身の爲めに私するが如き事はなかつたがそれが彼の手に移ると共に、鶴次、寅吉の二人には數千圓を割いて贈つたのである。

長き審理を経て、蜘蛛の目は終に死刑に處せられた、貫一は情狀を酌量されて、有斯懲役十五年の刑が確定し北海道に苦役してゐるといふことである。

悲劇 かくし妻 (後篇) 終

樋口隆文館
營業案内

△資本營業の方又は取次
販賣 營業の方で樋口隆文館

御取引を開始やうと思はる方は郵
券三錢御送り下されば、早速に御直
目録を御送りいたします。
△樋口隆文館は日本に於ける唯一の
貸本向小説専門の卸問屋であ
りますから、資本向の小説なれば東
京版でも大阪版でも一切取り揃へて
御安くいたします。

△樋口隆文館は自家出版物のみにて現に六百種程所有して居る者ですから安心して御懸念
無く御取引を願ひます。樋口隆文館は毎月新版月報を御得意様へ無料で御知らせ致します
△樋口隆文館は毎月赤字事なく續々新版を發行いたします其作者は現代に於ける知名の小説家
で加之に内容が面白く口繪が奇麗で其の製本の形式までがすべて資本向に出来て居ります。
△樋口隆文館の營業場所は大阪市南區三休橋 樋口隆文館 へ入四側、振替番號は大坂八七九七

大正五年七月九日印刷
大正五年七月十三日發行

定價金五拾五錢

所有權作著

【附夾編後妻しくい】

著者 和田天華

大坂市南區鏡谷中之丁
二百二十四番屋敷

發行者 樋口源次郎

大坂市南區鹽町通四丁目
十二番地

印刷者 紅野次郎

發賣元

大坂市南區三休橋
樋口隆文館

樋口隆文館

(振替口座大坂八七九七)

齋藤星瀾君作
鏑木清方君畫

木版極彩色密畫挿入頗美本

大阪毎日新聞

掲載小説

將基島

全 二 册

各一册五十五錢宛

送料 二册ニ付八錢

但し内地限り

本編は著者最苦心の創作にして、先に大阪毎日新聞社が、賞を懸けて小説を募集せし際に、入選受賞せる優秀の傑作なり、宜哉其毎日の紙上に掲出せらるゝや、讀者に多大の感動を以て迎へられ、續いて全國の各地にて劇に仕組まるゝや、至る所に於て非常の大當を占め得たる頗る波瀾に富める面白き小説なり。
其筆を、寒風吹き荒れる淋き冬の雨の一夜、大阪天満橋の中央に在る將基島より、投身せんとする貧困の母子を救ひ助け、當夜持合せし八十圓の紙幣を些の惜氣も無く彼等に恵み與へし一奮闘せる感すべき商人の努力、目的に邁進する健げなる苦學生の氣節、戀に惱める可憐の處女の煩悶、庸榮に心酔せし輕薄才子の最後の悲劇等、千變萬化する社會人情の表裏反覆を描寫曲盡せし絶好の讀物なり、乞ふ一讀して其眞價を知られよ。

島川七石君作
山本英春君畫

木版極彩色密畫挿入

悲劇 小説 亂れ髪

全三冊

各一冊五十五錢宛

送料三冊ニ付十二錢

但し内地限り

本編は大阪朝報紙上に掲出せられて大好評を博し、續いて劇に仕組まれ又活動寫真にも映寫せられて、各地至る所にて大入大當を占めしものにて、實に嶋川七石氏の近作中に於ける會心作の一である、舞臺は大阪及び其附近を背景として、これに登場する主要の人物には、華城南陽第一流の名花として俠艶比すべき無き梅香なる歌妓、及び彼女が意中の情人にして、彼女の俠情に依つて苦學しつゝある、法學生の岡田なる好青年、まゝならぬ戀に煩悶苦惱せる富豪の令嬢、目的の爲めに手段を擇ばざる心術卑劣なる今成金の好色漢、猶其他にも種々雑多の人物が「巴」と入亂れて興味甚深の大波瀾を活現する頗る面白き悲劇小説である

大正五年二月改正

樋口隆文館出版目錄 (小説之部)

發賣元

樋口隆文館

大阪市南區三休橋鰻谷南入西側

振替口座大阪八七九七番

樋口隆文館出版書目

—【新小説の一部】—

探偵 血染の手巾	同 忍術佐助	美人魔後編	横山花子後編
小説 戀しき仇	同 金崎英五郎	×女 獅子	×春 の 風
小説 幽霊船	後藤兵衛 諸國旅日記	×續 女獅子	×春 の 梶 原
落語 金馬集	鐘西八郎 爲朝	×七首 藝妓	×鬼 梶 原 續編
幻術 仙冠者義虎	怪勇朝比奈三郎義秀	×七首 藝妓後編	×鬼 梶 原 續編
天狗の木鼠小法師	奇怪魔の棲む洞窟	×櫻井一策	×雷 鳴 六 郎
剛勇荒象園鬼門	小説すめる心	×櫻井一策後編	×雷 鳴 六 郎 後編
槍の 小太郎	怪談幽霊の出る池	×風流 菩薩	×磯 の 松 風
四十八番御前大試合	女裝の井筒女之助	×風流 菩薩後編	×磯 の 松 風 後編
名匠佐分利左内	劍術名人大阪百人斬	×天狗 武士	×千 枝 子
忍術 木村太郎丸	小説妻 の 罪	×天狗 武士後編	×千 枝 子 後編
日本武術流祖録	幻術 武田三勇士	×俠妓 小鶴	×封 人 窟
磯畑伴造天下巡遊記	上杉 妖怪退治	×俠妓 小鶴後編	×封 人 窟 後編
疋田文五郎旅日記	三人 船越重右衛門	×千里 眼	×封 人 窟 終編
徳川御前忍術大試合	名人 船越重右衛門	×千里 眼後編	▼清風草堂主人著
怪風ひ清水冠者義高	房江と小百合子	×横山 花子	▼佛蘭西探偵譚
怪猫退治春日武勇傳	探偵怪 美人		
怪猫退治春日旅日記	討松 永三勇士		

裏の面を御覧下さい

樋口隆文館出版書目

—【花鳥叢書の一部】—

探偵 血染の手巾	同 忍術佐助	美人魔後編	横山花子後編
小説 戀しき仇	同 金崎英五郎	×女 獅子	×春 の 風
小説 幽霊船	後藤兵衛 諸國旅日記	×續 女獅子	×春 の 梶 原
落語 金馬集	鐘西八郎 爲朝	×七首 藝妓	×鬼 梶 原 續編
幻術 仙冠者義虎	怪勇朝比奈三郎義秀	×七首 藝妓後編	×鬼 梶 原 續編
天狗の木鼠小法師	奇怪魔の棲む洞窟	×櫻井一策	×雷 鳴 六 郎
剛勇荒象園鬼門	小説すめる心	×櫻井一策後編	×雷 鳴 六 郎 後編
槍の 小太郎	怪談幽霊の出る池	×風流 菩薩	×磯 の 松 風
四十八番御前大試合	女裝の井筒女之助	×風流 菩薩後編	×磯 の 松 風 後編
名匠佐分利左内	劍術名人大阪百人斬	×天狗 武士	×千 枝 子
忍術 木村太郎丸	小説妻 の 罪	×天狗 武士後編	×千 枝 子 後編
日本武術流祖録	幻術 武田三勇士	×俠妓 小鶴	×封 人 窟
磯畑伴造天下巡遊記	上杉 妖怪退治	×俠妓 小鶴後編	×封 人 窟 後編
疋田文五郎旅日記	三人 船越重右衛門	×千里 眼	×封 人 窟 終編
徳川御前忍術大試合	名人 船越重右衛門	×千里 眼後編	▼清風草堂主人著
怪風ひ清水冠者義高	房江と小百合子	×横山 花子	▼佛蘭西探偵譚
怪猫退治春日武勇傳	探偵怪 美人		
怪猫退治春日旅日記	討松 永三勇士		

裏の面を御覧下さい

○文庫一△文庫一△同形の類書は多数に出来て居りますが、其多くは、千編一律単調同題のものでありまして、少し眼の肥えた人や常識の進んだ方には、目眩く馬鹿くしくして讀むに堪えないものが多いやうですが、今回樋口隆文館より發行しました花鳥叢書は、少しそれ等と趣きを更へまして、千編千様にそれ／＼異つた妙趣が有りますやうに題材の選擇に意を用ひましたから、中には、著者奇抜な探偵小説もあれば、情味甚深の懸案小説、勇剛壯快な武勇譚、洒脱滑稽の落語集、凄絶慘絶の怪談物、怪奇深淵な冒險談、忍術幻術の名人傳等もありませうから、少年家庭の讀物としても、大人消閑の伴侶とせられても、至極適當のものでございませう。製本はボケツト形の天金クロス表装、色箱金箔併用の美本でありますから机上や書齋の飾りとしても奇麗です。實價は、これでも選り取り一冊に付貳拾五錢の均一で送料は日本内地であります。上記の題名の他に、追々一冊僅に貳拾五錢でまゐります。上記の題名の他にも追々發行の準備中とございませう。

樋口隆文館出版書目

—[新小説の三部]—

×澄める心	▲霞堤著	×戀しき仇	▼黒法師霞堤著	×七本櫻	▼泉鏡花著	流る、星後編	流る、星	×陰に咲く花終編	×さくら草紙終編	×さくら草紙終編	×さくら草紙終編	×さくら草紙終編	×春雨草紙後編	×野菊の家終編
亂れ髪終編	亂れ髪後編	罪	罪	憐なる雪子後編	憐なる雪子	×松田大尉後編	▼島川七石著	□香人形後編	若夫	琴の音	□香人形	現代の女	□女學生	
關の花後編	關の花	×蘭子と信吉終編	×蘭子と信吉後編	×戀のしがらみ終編	×戀のしがらみ後編	呪ひ火終編	呪ひ火	つきの縁終編	つきの縁後編	涙の雨後編	戀	武士系	罪ならぬ罪	
菩薩小僧終編	菩薩小僧後編	菩薩小僧	×お雪幸七終編	×お雪幸七後編	憐なる母と娘後編	姉と弟後編	姉と弟	浮寝鳥後編	浮寝鳥	毒百合後編	毒百合終編	春待つ人後編	野菊の家後編	

裏面を御覽下さい

樋口隆文館出版書目

—[新小説の二部]—

×浪まくら終編	×浪まくら後編	×浪まくら	かくし妻後編	かくし妻	女のみこゝろ後編	女のみこゝろ	静子後編	×静子終編	▼和前天華著	□母の秘密	□母の秘密	×月に雲後編	▼河原紅雨著
×機性終編	×機性後編	×機性	×おとし見後編	×おとし見	×二人の女終編	×二人の女	×戀の意氣地後編	戀の意氣地	陰の人後編	愛の関終編	愛の関	罪ならぬ罪	雲續々編
×雲後編	×雲終編	×雲	×命後編	×命後編	×男終編	×男後編	▼羽様荷香著	羽様荷香	上田君子著	雲終編	雲終編	雲終編	雲終編
野菊の家後編	野菊の家	×春待つ人終編	×春待つ人後編	戀のあだ浪終編	戀のあだ浪	浪かしら後編	浪かしら	小嶋孤舟著	黒牡丹	雲終編	雲終編	雲終編	雲終編

裏面を御覽下さい

樋口隆文館出版書目

—【新小説の五部】—

▼遠藤柳雨著	×恨の焰後編	×恨の焰後編	▼富の力後編	□富の力終編	□富の力終編
雨後の月終編	須磨子後編	須磨子後編	▼青峯著	□女小説家	□女小説家
舞ひ風後編	舞ひ風終編	山田松琴著	▼運塚麗水著	□白菊御殿	□白菊御殿
▼新田静濤著	戀の淵瀨後編	知らぬ親後編	知らぬ親後編	×残り草後編	×残り草後編
戀の淵瀨終編	□戀の淵瀨終編	×残り草後編	×残り草後編	腹ちがひ後編	腹ちがひ後編
□愛と財後編	□愛と財後編	腹ちがひ後編	腹ちがひ後編	×其の女	×其の女
□愛と財終編	□愛と財終編	▼鳴村抱月著	▼鳴村抱月著		
□富の力	□富の力				

裏面を御覧下さい

樋口隆文館出版書目

—【新小説の四部】—

▼伊藤銀月著	×子	×隣合せ後編	▼中村兵衛著	▼須藤南翠著
×出	×隣合せ終編	□探偵血染の手巾	□浮木船	□浮木船後編
×怒濤後編	▼安岡夢郷著	□小説月の輪	□浮木船後編	□浮木船後編
▼行友李風著	□地獄谷	□女水月尼	□浮木船後編	□浮木船後編
龜甲組後編	□地獄谷後編	□妻の罪	▼鹿嶋櫻巷著	▼鹿嶋櫻巷著
龜甲組終編	□薄命怨後編	□狸の心中	□戀の敗者	□戀の敗者
×因果終編	□薄命怨後編	□父なき子	□戀の敗者後編	□戀の敗者後編
×人の怨後編	□罪の子後編	□甚九郎稻荷	□刺ある花	□刺ある花
×人の怨終編	□罪の子後編	□甚九郎稻荷終編	□刺ある花後編	□刺ある花後編
▲大澤天仙著	×洞窟の怪美人	▼芳尾生著	□女香具師	□女香具師
×催眠術	×洞窟の怪美人後編	□怪談皿屋敷	□女香具師後編	□女香具師後編
▼春風樓主人著	×紫組後編	▼春秋園著	□海の豪傑	□海の豪傑
×藤浪後編	□肖像畫終編	□俠妓胡蝶	□海の豪傑後編	□海の豪傑後編
	□肖像畫終編	□俠妓胡蝶後編	□女賊三人	□女賊三人
			□女賊三人後編	□女賊三人後編

裏面を御覧下さい

樋口隆文館出版書目

—【三部の説小談講】—

○四十御前大試合	○怪談水谷騷動	○怪談後の水谷騷動	○俠客伊丹の興之助	○女俠伊達のお峰	○俠客歌天安太郎	▲松林伯知講演	○講談太平記	○同卷之二	○同卷之三	○同卷之四	○同卷之五	○細川十傑傳	▲玉田玉芳齋講演	○小松後藤藤太郎	○三勇士	○同稻葉太郎	○同水間大八郎	○豪傑杉本備前守
○同武田武者之助	○同武田鬼景	○同神刀忠次郎	○豪傑勢揃輪城大九討	▲桐野金城講演	○天下幽霊問答	○怪談後日の幽霊	○天下最後の饗	○産湯の森變化退治	▲南隆旭堂一遺講演	○義俠信夫常吉	○後の信夫常吉	○最後の信夫	○鮮血妙園寺	▲松月堂魯山講演	○劍客木曾庄九郎	○劍客木曾白雲齋	○黒田四郎兵衛	
○三劍士相合道中	○難波一藤齋	○破畑伴藏秀國	○破畑伴藏旅日記	○流龍鐘捲通家自齋	○鐘捲自齋巡國記	○龜井名槍傳	○豪傑龜井武藏	○劍法諸岡大天狗	○劍法諸岡小天狗	○劍法川崎東軍坊	○劍法衣斐丹石入道	○飯沼鐵牛軒	○剛勇齋藤傳鬼坊	○豪傑小松一卜齋	○同人見熊之助			
▲浮世亭夢丸講演	○俠時宗五郎兵衛	○俠客後の時宗	▲神田伯海講演	○講談お俊傳兵衛	○お俊傳兵衛後日談	○怪傑金忠輔	○同後の金忠輔	○同其後の金忠輔	○仇摩耶山靈驗記	○豪傑瀬川采女吉次	○同後の瀬川采女	○講演滑稽揃	▲神田伯麟講演	○素人探偵	▲寶井琴凌講演	○真田幸村傳		

裏の面を御覧下さい

樋口隆文館出版書目

—【二部の説小談講】—

▼秋月玉光講演	○俠客藥師の梅吉	○同後の藥師	○同其後の藥師	○女俠龍神お玉	○女俠後の龍神	○俠客唐獅銀治	▲旭堂南陵講演	○豪傑青地作右衛門	○同上總六郎	○同大力半之助	○犯神松平辰子	○同屑屋鐵五郎	○海賊船東天丸	○東天丸五良吉	○俠客劍の電次	○同甲州定五郎	○同墨田の夜風
○同最後の血櫻	○天正加藤孫六嘉明	○高倉長術	○後の高倉	○旗本船越八郎	○源三位の松	○善悪お淺	○赤格子九郎兵衛	○入若大次郎	○神崎堤百人斬	○章駄天大八	○火車軍次	○甲府仇討	▲山崎琴書講演	○怪人伊藤夏子	▲東光齋松月堂榎林講演	○三槍本佐分利左内	○三槍本大嶋伴六
○三槍本梅田奎之丞	▲石川一口講演	○討尾張傳内	○淀屋辰五郎	○幽霊の片袖	○客黒船忠右衛門	○真葛ヶ原仇討	○奇聞辨天娘	○講談四千両	○金藏犬塚富藏	○怪力石原平四郎	○美譽武内謙之助	○岩井肥後の仇討	○客鏑綱長吉	○女九龍尼崎りや女	○男丸龜大仇討		
▲春帆樓白鷗講演	○天狗流譽の幻術	○駿河龍千代	○幻術名人原熊若	○原熊若幻術漫遊	○三槍本原出孫七郎	○三槍本山田仁左衛門	○三槍本濱田彌兵衛	▲平林黒猿講演	○俠客祐天吉松	○義俠水戸清五郎	○幻金五郎	▲秋津洲櫻香講演	○怪談不思議の家	▲東海亭金龍講演	○二代の勇士	○飯田友千代ハ	○武勇槍の小太郎

裏の面を御覧下さい

樋口隆文館出版書目

—【四部の説小談講】—

▲寶井琴柳講演	○赤穂大高源吾	▲大阪大家競演
○仇松永三勇士	▲小林城南講演	※大阪浪花節大會
▲邑井一講演	○改良伊藤博文	※同 第二集
○佐野次郎左衛門	▲廣澤當圓講演	▲東西大家競演
▲放牛舎桃湖講演	○佐藤勇婦傳	※浪花節講演集
○寶藏院名槍傳	○佐藤仙臺大仇討	※同 第二集
▲桃川一山講演	▲玉廬家雀燕講演	▼浮世亭夢丸講演
○討荒木又右衛門	○筑紫の荒波	○浪花節勇士揃
○討宮本武藏傳	○辰の口大評定	○同 武勇鏡
▲揚名舎伯林講演	○金華山奇人退治	○同 俠客揃
○敵岩見重太郎	○惡津久七苦心談	▲舟坊著
○敵田宮坊太郎	○海峽の慘劇	○喜劇十二番
○敵佐野鹿十郎	○落語家連講演	▲大阪三友派講演
○尼子十勇士	○笑となみだ	○三友落語集
○敵笹野權三郎	▲京山恭高講演	▼三遊亭金馬講演
○近江源氏佐々木四郎高綱	○彦根騷動勇婦お政	○落語金馬集
▲揚名舎桃李講演	○蘆野平太郎	▼大畑匡山著
○赤穂義士赤垣源藏		□諸國珍談集

樋口隆文館

出版書籍定價表

- 小賣直 卸直
- 印は貳拾五錢
- 印は貳拾八錢
- 印は四拾錢
- ×印は四拾五錢
- ||印は五拾錢
- ※印は參拾錢

卸直目錄は販賣若くは
貸本營業の方に限り郵
券三錢送らるれば進呈
す
送料は一冊六錢、三
冊迄八錢
但し内地限り

裏面を御覧下さい

齋藤星瀾君作
齋藤清方君畫

木版彩色密書挿入類本

大阪毎日新聞 將基島

全 二 冊
各一冊五十五錢宛
送料 五冊二付八錢
但し内地限り

本編、著者最苦心の創作にして、先に大阪毎日新聞社が、賞を懸けて小説を募集せし際、入選受賞せる優秀の傑作なり、宜哉其毎日の紙上に掲出せらる、や、讀者に多大の感動を以て迎へられ、續いて全國の各地にて劇に仕組まる、や、至る所に於て非常の大當を占め得たる頗る波瀾に富める面白き小説なり。

其筆を、寒風吹き荒れる淋き冬の雨の一夜、大阪天満橋の中央に在る將基島より、投身せんとする貧困の母子を救ひ助け、常夜持合せし八十圓の紙幣を些の惜氣も無く彼等に恵み與へし一青年の義侠に起して、性質の異なる三人の青年と、三人の命懸との奇なる運命の交錯、逆境に奮闘せる感すべき商人の努力、目的に邁進する健けなる苦學生の氣節、戀に悩める可憐の處女の煩悶、虚榮に心酔せし輕薄才子の最後の悲劇等、千變萬化する社會人情の表裏反覆を描寫曲盡せし絶好の讀物なり、乞ふ一讀して其眞價を知られよ。

島川七石君作
山本英春君畫

木版極彩色密書挿入

悲劇 亂れ髪

全 三 冊

各一冊五十五錢宛

送料三冊ニ付十二錢

但し内地限り

本編は大阪朝報紙上に掲出せられて大好評を博し、續いて劇に仕組まれ又活動寫眞にも映寫せられて、各地至る所にて大入大當を占めしものにて、實に嶋川七石氏の近作中に於ける會心作の一である、舞臺は大阪及び其附近を背景として、これに登場する主要の人物には、華城南陽第一流の名花として俠艶比すべき無き梅香なる歌妓、及び彼女が意中の情人にして、彼女の俠情に依つて苦學しつゝある、法學生の岡田なる好青年、ま、ならぬ戀に煩悶苦惱せる富豪の令嬢、目的の爲めに手段を擇ばざる心術卑劣なる今成金の好色漢、猶其他にも種々雑多の人物が混入して入亂れて興味甚深の大波瀾を活現する頗る面白き悲劇小説である

橋本埋木庵君作
山本英春君畫

極彩色木版密書挿入美本

事實 菩薩小僧

全 四 冊

各一冊五十五錢宛

送料一冊六錢
四冊十二錢
但し内地限り

本編は神戸新聞紙上に連載して無前的大好評を博せし事實小説にして實に過去に於ける數多き埋木庵氏の作物中にも拔群最長の雄編にして又最も得意會心の傑作なり、一編の主人公は破戒墮落せる外面如菩薩の年若き美僧にして、配するに、艶麗花の如き妙齡可憐なる美少婦を以てし、これに關係せる人物と局面は、甚だ多く且つ濶くして、流轉極まり無き編中の男女が、險く吹き荒む浮世の波と風に、搖られ揉まれて七仆八起、浮きつ沈みつする運命の數奇なるには、憤るべきあり、悲むべきあり、憐むべきあり、憎むべきあり、實に全編、情と血と涙とに充ち満ちし一大活劇小説にして、又一大悲劇的事實小説なり、乞ふ一讀せられん事を。

歌行友李鳳君作 木版極彩色密書挿入頗美本

大阪新報 怪人の怨 全三冊

送料一冊六錢三冊八錢(但し内地限り) 定價各一冊五十錢宛

あな怖しや人の怨霊、かくも執念く付き纏ひ怨み崇るものか、本編は大阪新報紙上に連載して大好評を博した一大怪談小説であつて實に行友李鳳氏が最も得意とせらるゝ會心の傑作です、事實は有名なる小幡小平次淺香の沼の怪談をば著者が獨壇の凄奇怪慘の筆で一種平明の文体に記述せられたものですから、講談物のみを讀で居られる御人にでも讀まれ得る多人數向の至極面白い讀物です、論より證據一度讀んで見てください、隆文館の主人が御勧めいたします。

山田松琴君作 木版極彩色密書挿入

悲劇腹ちがひ 全三冊

定價各一冊五十五錢 送料一冊大錢 三冊八錢

本編は新進の作家山田松琴氏が最も苦心得意の作でして、残り草、迷ひ路等よりもより多き同情を讀者より寄せられた、情と血と涙に満ちた趣味深き悲劇小説です、論より證據一度讀んで見てください。

217
609

終

